

近代化における伝承観の混在と変容：遠野市の事例から

岡, 幸江
九州大学大学院人間環境学研究院教育社会計画学講座：准教授

<https://doi.org/10.15017/2928833>

出版情報：大学院教育学研究紀要. 22, pp.103-124, 2020-03-25. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

近代化における伝承観の混在と変容

— 遠野市の事例から —

岡 幸 江

第1節 課題の設定

(1) 本論の課題

本論は、伝承者・阿部ヤエが伝える「人の一生を育てる伝承」に着目し、彼女が生きた遠野という土地が伝承のありように対して与えた社会的力学に注目しながら、この地における伝承観の推移を論じようとするものである。

阿部ヤエが生きた岩手県遠野市では、戦後直後頃まで、多くの集落でわらべうたや昔話の祖父母一孫への語り継ぎが行われていた。同じ集落に育つ子は、同じうた・話を通して育てられたという。

ただし阿部に継承されたような、うたや話の現象の背後にある「意味の体系」は、現地遠野でもほとんど知られてこなかった。地域の限られた人を通して密かに受け継がれてきたためである。それは自然信仰・早池峰信仰に深く根ざして全体が形成されており、熊野山伏の系譜をひく人たちから伝えられ、語り継がれてきたという。

これらは、阿部が表で語り始めてからも、阿部の意図通りに理解されることは少なかった。実際には民俗としての語りやうたを経験した人にとっては、言われてみればそうだったのか、という感をもつ人もいる。たとえば阿部と同じ集落で生まれ隣集落に嫁いだのちに阿部と地域活動を共にした女性は、子どもに関わりかける唄やはなしそのものは、阿部と共有していた。しかし「(阿部ヤエの著作を読むと)意味も全部書いてるから、見るとそういう意味だったんだ、と思う。いろんな動作は覚えるけど、何のため、そこまでは考えない。なぜやるのかまでは考えない。だからこういうためと書いてあるのを読むと、ええ、そうだったの?と。一つとっても全部意味あることだもんなあ。」⁽¹⁾と筆者に語っている。習い覚えたうたやはなしは阿部と共有していても、その意味は共有していなかったわけである。まして実体験のないまま、遠野の習俗文化を系統的に探究しようとする者には、この「意味の体系」はおよそ理解しがたいものだろう。

また本論は、伝承をとりまく社会的背景に着目する。1970年前後より、遠野市は「民話のふるさと」を掲げて『遠野物語』をまちづくり計画の中心に位置づける。連動して遠野は、民俗学や口承文芸学において大きな位置を占める地となっていく。こうした動向は、地域の伝承観に大きな影響を与えていったのではないだろうか。

なお本論と同じく社会教育研究の立場から、佐藤一子が遠野の民俗文化とその継承に関する研究をすすめる。近年『地域文化が若者を育てる』(2016)⁽²⁾にまとめている。佐藤は「市外から交流人口を招くという観光振興にむけたハード面の整備がきっかけとなって、行政と市民が対話し、市民自身が主体的に発想し、企画運営しながら多彩な文化交流空間を広げてきた過程こそ、遠野市の「文化的なまちづくり」の特徴として注目される」⁽³⁾と、行政主導のまちづくりが次第に市民協働の展開へと広がり定着していく過程に注目する。着眼対象は伝承の継承者を育てる語り部教室・語り部第2世代のグループ「いろり火の会」・「子ども語り部」、また『遠野物語』を現代的に再生する遠野物語ファンタジーである。本論は、社会教育学研究として、「教育の社会的な組織化」に基本的な関心を置き、遠野の伝承文化に着目する点で佐藤と関心を共にするが、伝承文化へのアプローチにおいては違いがある。端的にはそれは、アソシエーションに基づく学習と文化の組織化過程に目をむける佐藤のノンフォーマル教育的視座と、暮らしに根ざした学習の様態そのものに関心をおく本論のインフォーマル教育的視座の違いにある。

(2) 伝承をめぐる4つの観点

ここで、伝承をめぐる、遠野における複数の動きおよび観点の存在を、確認しておきたい。

最初に先にのべたような、集落ごとに共通性をはらみつつ、人々によって日常的に実践されてきた、〈習俗としての伝承〉がある。

同時に特に遠野市においては、観光・文化のまちづくり政策と「伝承」の関係を考える必要がある。遠野駅からほど近い遠野の観光集中地区の一角にある「とおの物語の館」には、「おかえりなさい、民話のふるさとへ」と掲げられている。この館の展示には遠野だけでなく日本の民話全体が視野にあり、全体に日本の民話の里としての自負が感じられる。今や民話の里で知られる遠野市は、1970年前後より、柳田國男『遠野物語』を前面にかかげた観光・文化のまちづくりを、行政一体となって計画的に進めてきた。このプロセスには、柳田國男研究や民俗学にかかわる多くの研究者たちが関与し、また当初後藤総一郎が率い地元研究集団に成長していく「遠野常民大学」のちの「遠野物語研究所」に象徴されるように、住民も少なからず参加した。またこうした文化のまちづくりに教育施策が深くかかわっているのが遠野の興味深いところでもあり、それには社会教育・学校教育両者が含まれる。

このまちづくり政策の展開にかかわって、習俗としての伝承とは異なるシンボルとしての「民話」「語り部」をめぐる独自の現象が生じていることが、遠野にかかわった研究者たちからも指摘されてきた。例えば観光まちづくりと接点をもった初期の語り部たちは、自らが幼い頃から聞いてきた話にはなかった『遠野物語』に集録された話を、依頼に基づき新たに学んで語りの中に組み入れ、まちづくりの方向や観光客の求めに応じて編集したという。以降への影響も含め、これを政策枠内においてうまれた新たな伝承としての〈制度化された伝承〉とおいしてみたい。この指摘に関しては、口承文芸研究において「語り手論」を本格的に開拓した野村純一や、口承文芸に比重をおく文学研究者であり、一時は遠野市博物館・図書館の館長もつとめた石井正巳に注目する。石井は『遠野の

民話と語り部 (2002)』⁽⁴⁾ や当時の関係者たちへの聞き書き記録としての科研報告書 (2003-2004)⁽⁵⁾ その他の書籍を公刊している。

こうした現象の背後には、まちづくりの核に位置付けられた柳田國男『遠野物語』とこれをめぐる研究の影響が存在する。『遠野物語』を、習俗としての伝承と同じものとみるか、あるいは柳田國男によるひとつの文学としてみるか、そしてそれにどう向き合うかは、『遠野物語』研究の重要な争点の一つであった。こうした知見の蓄積としての、〈研究者のみた伝承〉も存在するだろう。

そして本論が注目する、阿部ヤエの伝える「人の一生を育てる伝承」は、これらどれとも異なるものである。これを本論は〈意味としての伝承〉とおいてみたい。

こうした仮説を前提に、本論は、〈①習俗としての伝承観〉、〈②政策によって変容した(制度化された)伝承観〉〈③研究者たちの伝承観〉〈④意味としての伝承観(阿部ヤエの伝承論)〉という、4つの伝承観をめぐる相違と接点を意識し論じながら、阿部ヤエ伝承論の輪郭をさぐっていくこととしたい。

第2節 まちづくり生成期における2つの伝承観の交錯

まず、遠野の観光・文化まちづくりの生成期における伝承観についてみてみよう。石井正巳の科研報告書には、長く社会教育行政に従事し1964年から中央公民館長をつとめ、その後商工観光課で観光まちづくりにも中心的に携わっていった梅田収得、梅田の後任の商工観光課長として遠野観光の成立に深くかかわった菊池幹、商工観光係長から市民センター構想が実現していく最中の市民センター社会教育部長をつとめていった多田良城、そして市役所職員として図書館・博物館や遠野常民大学の発足にかかわっていく似内邦雄の聞き書きが集録されている。この遠野型まちづくりが成立していく過程のキーパーソンたちへの聞き取りは、遠野市がもつまちづくりと語りをめぐる文脈においても、貴重な資料と考える⁽⁶⁾。

彼らの肩書にも明らかであるが、遠野市は市の総合計画の中心に、社会教育施設である「市民センター構想」を計画・実現してきたことで知られている。1970年前後当時から、まちづくりと社会教育は一体的に進められるべきという考えが、自治体政策上で実践されていたわけである。

1954年、一町七ヶ村合併で遠野市が誕生する。言葉も違えば祭りも各々豊富に残り、際立って異なる文化を持つ旧8自治体の合併である。梅田によれば遠野は合併以前から文化財に心配りがある人が多かったという。

『文化財報告書』の発刊、有形無形文化財から民俗芸能、高山植物のことまで、それぞれの報告集があるのです。一中略一あの頃は、県下の市でも、文化財報告書なんかを作るなんてなかったですよ。」

「遠野には相当な人たちがいたんですね。文化財専門委員が調査して、報告書にまとめたのは、経済財ならぬ文化財として市が指定し、これを永く保護して教育文化の振興や観光の面でも役立てていく必要があるからです。」⁽⁷⁾

遠野が「民話のふるさと」を標榜するに至る要因には、吉本隆明『共同幻想論』（1968）が『遠野物語』を素材としてとりあげたこと、国鉄のディスカバー・ジャパン戦略、そうした影響をうけた若者たちによる遠野詣でブームもあったといわれる。それらが遠野市の動きや人々の心理に影響を与えたことは間違いないだろう。だが本質的に、有形無形の文化財、史跡や自然、民俗資料までかなり包括的にしっかりと調査・文字化が行われていたことに象徴されるように、遠野には内発的に郷土をみつめ学ぶ気風があったと、梅田はいう。

「工藤（千蔵）市長の頭の中には、郷土を想い、郷土を学んで、これを正しく伝えていこうという一貫した考え方が流れているんだと思いますね。」⁽⁸⁾

1971年、全国初の柳田國男の碑とされる『遠野物語碑』が駅前を設置される。『遠野物語』上梓60周年を記念したものであり、除幕式には柳田國男の孫と佐々木喜善の息子も主賓に招かれた。1970年の岩手国体を前にした1960年代後半、遠野市行政全体が活気づき、梅田によれば外からの来訪者を意識した設置だったという。そして同年国鉄の「ディスカバー・ジャパン」に「民話のまち遠野」も登場し、観光まちづくりを加速させていく。それまでの遠野の観光資源は荒川高原など自然を主として考えられたものであったため、1970年前後の動きは市の観光まちづくりの方向転換を意味していた。

これ以降、民俗というよりも、『遠野物語』に力点をおいた観光まちづくりが進んでいく。「遠野の民俗」と『遠野物語』はイコールではない。だが遠野の観光まちづくりは結果として、両者の同一化を促していったと考えられる。のちにみるように、「語り部」たちが祖父母や両親から聞いた話にはなかった『遠野物語』を、観客や周囲の求めに応じて学び、組み替えていったことは、その象徴である。

ただし本論はそうしたなかでも、当時の行政担当者の一部がこの二者を正しく区別して理解していたことに注目している。たとえば遠野観光の成立に深くかかわった菊池幹は、「民話」と「民俗」を明確に区別し、遠野が本来もちあわせるのは「民俗」であるという。しかしそれがわかる遠野の人がほとんどいないことを嘆く。

「民俗」では、もっともっと遠野には材料があるが、関心のある人でなければ。「民俗」とか「歴史」とかね、大変なもんだ。今で言えよ。あの中にもいろいろな教えだとか何がある。要するに山伏たちが、一つの教育の手段として「民話」を教えていった。だから、わたしたちがおがる（成長する）ときには、「民話」なんて内容がわからなくても「むかし、むかしあったずもな」って、何回も同じことを繰り返して、そうやって歴史を教えていく。あらたまって「民話のストーリーはこうだ」なんて、そういうのはない時代でした。」

「遠野の風土というのがわからないのね、一町七カ町が合併しているからね。一町七カ村、みな、言葉が違うからね。「そういうような雰囲気は何でしょうかね」と聞かれたときに、それは、大雑把でも「こういうわけで違うんだよ」とか話ができる人がいればいいんだが、大変なもんだ。」⁽⁹⁾

前者の発言において菊池は、「民話」なかでも『遠野物語』としてある種偶像化されたストーリー

群とは異なる、遠野の民衆文化としての「語り」の存在とそのあり様を伝えている。一般家庭で営まれる「語り」は、山伏たちが教えたものの継承であり、多くの「教え」をはらんでいたこと、それが子どもたちの成長にむけて繰り返し語られ、子どもをめぐる日常に埋め込まれていたという。まさに阿部ヤエ伝承論に近い理解である。菊池自身がそうした民俗の営みを経験してきたことも、発言からはうかがえる。

また菊池の后者の発言からは、その民衆文化としての「語り」もまた、本来旧村ごとによって異なるものであり⁽¹⁰⁾「遠野」というくくりで語りえるものではなかったことがうかがえる。それでも外部に発信される折には「遠野の」風土や民話であり、そのギャップに当時の遠野の人々が翻弄されていたことも認識されている。実際、『遠野物語』は、柳田國男に語り聞かせた佐々木喜善の出身地、旧土淵村の話で多くが構成されている。土淵町以外の遠野市民にとっては「よその村の話」である。そうであったとしても、実際に遠野で進められたのは「民話のふるさと」としてのまちづくりであり、『遠野物語』顕彰とそこへの焦点化であった。それは1954年の自治体合併による新市形成への政策的必然でもあっただろう。当初遠野の人々自身ももっていた「語り」への認識とは異なるかたちで存在しはじめる「民話のまちづくり」に対して、菊池は「民話にウエートがかかりすぎ、本当の遠野を見失うことになる」⁽¹¹⁾と、危惧も表明している。

それでも、「トオヤ」「エンヤ」と誤読されていた遠野市が全国的に認知されていく契機として大きな役割を果たしたのは、『遠野物語』に他ならなかった。町おこし・町づくりを他市町村と同様課題としていた遠野市にとって、『遠野物語』文庫本は市長の名刺代わりとなっていたという。テレビや雑誌が遠野をとりあげるようになり、多くの学生や研究者、若い観光客が訪ねてきた。訪ねてくる人に遠野の人が遠野のことを紹介できないという困惑の時期を経て、容易に遠野のことを紹介できるよう、行政職員であった菊池によって、遠野人のための遠野の案内書である『遠野路』（1975）も著された。

先の菊池の内在的理解と、菊池の外部への案内書執筆という行動は、二重性をはらんで見える。そもそも遠野は山の中の盆地でありながら、外部との濃い接触の長い歴史をもつ。馬の市がたつ交易の重要地点であり、早池峰信仰にかかわる参拝者や金山労働者が集まる地でもあった。いわば遠野を訪れ通り過ぎる人と人の交差点であり続けてきた。民俗資源がこれだけ豊かに残っているのも、この土地柄と関係がある。こうした歴史的背景をもつ遠野にあっても、それまでの交流の歴史と、1970年以降の観光まちづくりに基づいておきた人の流れは、地域の人々の民俗・伝承観に与えたインパクトにおいて、かなり異なる性質のものであったというべきである。

「わたしは遠野の人たちが訪ねてくれる観光客の動向に刺激され、『遠野物語』の価値、あるいは大事さを自覚させられた感化は非常に大きいだろうと、今も思い続けています」(多田良城)⁽¹²⁾

遠野の民俗世界の伝承観と葛藤しながら当時の市政の流れに携わっていた菊池に対して、多田の目線は遠野へやって来る観光客、より外へ向けられているように思われる。むしろこうした観点にたつ人のほうが、行政的にも一般的だったであろう。たしかに『遠野物語』は、早くからまちづくりに熱心にとりくんだ遠野市にとって、なくてはならない大きなコンテンツであったにちがいない。

遠野市民にとって当初決して身近ではなかった『遠野物語』を、住民自ら学ぶという営みがのちにたちあがってくるのも、地域を学ぶ大事な営みのひとつに違いない。だが同時に、次第に増す『遠野物語』の影響力の大きさは、伝承への見方を混乱させることにもなる。『遠野物語』は遠野における民衆文化の価値を再発見させる媒体であるとともに、その文化および遠野の人々の自らの習俗文化への認識を変容させかねない、両面性をはらむ存在だったのではないだろうか。

ここに本論は、『遠野物語』の政策的浮上に伴って、〈習俗としての伝承〉と、政策によって変容した〈制度化された伝承〉の混同がはじまっていたとみる。

第3節 新たな伝承観の基盤としての「トオノピアプラン」と市民センター構想

この〈制度化された伝承〉の具体を探るには、観光まちづくり施策と同時に進められた、総合計画「トオノピアプラン」に伴う施策自体をみていくことが必要である。

先に梅田は「内発的に郷土をみつめ学ぶ気風が、遠野にはあった」と語っていた。そして当時の工藤千蔵市長がその構えを基本的に有していたとも述べていた。

歴代市長の政策を継承しつつ、1966年に着任した工藤市長のもとで本格的に構築されたのが1968年に策定された遠野市総合計画「トオノピアプラン」であり、市の総合計画と社会教育を合体させて施策化された市民センター構想である。

トオノピアプランは、家族を基本単位とする生活圏をもって構成されている。全市施設としての市民センター設置と、旧村単位にあたる農村生活圏7地区に、地区センター（社会教育施設）とカントリーパークの設置が計画された。

社会教育施設計画にあたる市民センター構想は、第4期にわけた施設群の建設によって、具体化された。第1期、全市施設としての市民センター（舞台鑑賞を影響する市民会館と中央公民館合築施設）が1971年に設置された。ここには当時、市長部局の広報・広聴・保健・青少年健全育成・環境保全・公害対策、および教育委員会社会教育部門が、部門を横断する組織形態をもって市民センター庁舎に入った。第2期施設の温水プール・武道ホールを併設する体育館（1974年完成）、第3期の老人憩いの家と続いたあと、第4期には1980年、市民センター近くに市立図書館と博物館が設置された。この第4期施設群は、遠野駅からほど近い、小高い丘の上の旧城跡でもある南部神社のふもとエリアに、集中して建てられており、現在の観光施設集中地区へつながっている。

「トオノピアプラン」は、市の全市的拠点施設群を意味する「市民センター構想」だけでなく、昭和の大合併時の旧村（七ヶ村）単位の地域づくり構想と連動していた点に特徴がある。この構想の背後には、人づくりの拠点は生活圏という考え方があった。各地域の地区センターには、施設面であれば、それぞれ体育館、運動場、児童公園、民俗資料館などの施設を整備し、付近の小中学校、保育園、診療所、郵便局、駐在所など公的機関とあわせて、地域生活を支える拠点機能の整備がはかられた。

これが地域づくり構想と連動するといえるのは、単に施設設置のみならず、社会組織の維持再編

近代化における伝承観の混在と変容

との連動で構想されていた点にある。下記の表にみられるように、地区から行政区，部落単位までみていくとき，生活や社会教育関連組織はもとより，当時の地域の基幹産業である農業組織も細やかに位置づけられていることがみとれる。

表Ⅱ-2 生活圏組織構成図

生活圏	農村都市生活圏	農村生活圏	基礎集落圏	自然集落圏	近隣集落	家族
単	遠野市	地区(町)	行政区	部落	班	戸
構		1 地区	15行政区	22町内会	252 班	3,225 戸
成		7 地区	55行政区	138 部落	511 班	4,887 戸
村域	〔1 市街地〕	〔2 地区あたり1つ行政区〕	〔3 行政区あたり1つ部落〕	〔4 部落あたり1つ班あたり1つ戸あたり1つ〕		
主な社会組織	<ul style="list-style-type: none"> ○市民憲章推進協議会 ○区長連絡協議会 ○交通安全協議会 ○教育振興協議会 ○婦人団体協議会 ○青年団体協議会 ○体育協会 ○芸術協会 	<ul style="list-style-type: none"> ○区長会 ○地域づくり協議会 ○体育協会 ○教育振興協議会 ○交通安全協会 ○PTA ○婦人会 ○農協婦人部 ○農協青年部 ○青年会 ●スポーツ少年団 	<ul style="list-style-type: none"> ○区長 ○消防団 ○青年会 ○老人クラブ 	<ul style="list-style-type: none"> ○農事実行組合 ○防除組合 ○衛生組合 ○婦人会 ○農協婦人部 ○納税組合 ○出資組合(株) ○子供会 	<ul style="list-style-type: none"> ○隣組 ○回覧板 	
主な生活圏施設	<ul style="list-style-type: none"> ○市民センター ○中央公民館 ○市民会館 ○勤労青少年ホーム ○市民体育館 ○市民プール ○図書館・博物館 ○特養ホーム ○養護老人ホーム ○老人保養センター ○市民運動場 ○病院、診療所 ○高等学校 	<ul style="list-style-type: none"> ○地区センター³⁾ ○地区公民館 ○就業改善センター ○生活改善センター ○環境改善センター ○基幹集落センター ○定住促進センター ○農協支所 ○保育所 ●児童館 ○小学校 ○中学校 ●駐在所 ○郵便局 ●診療所 	<ul style="list-style-type: none"> ○洞窟屯所 ○集落センター ○こどもの広場 	<ul style="list-style-type: none"> ○掲示板 ○ごみステーション ●部落公民館¹⁾ 120箱 ●防火貯水槽 ●消火栓 ●ポスト 	<ul style="list-style-type: none"> ○街路灯²⁾ 1610基 	<ul style="list-style-type: none"> ○農事放送電話

注：1) 部落公民館の設置管理は部落であるが，市は電気料相当額を補助。 2) 街路灯の設置は部落，電気料は市が直接負担。 3) 地区センター、市民センターは全面的に市。 ○…各地区とも共通してある。 ●…ない地区もある。 ●…一部の地区にある。

資料：『大自然に息吹く永遠の田園都市』 遠野市

(中央大学人文科学研究所『民衆文化の構成と展開』中央大学出版部、1989年、269頁)

ここには，活発な青年団や婦人会活動その他の地域団体の歴史的地盤，およびその他市民個々人の日常的な地域活動の延長上に存在し，旧町ごとに束ねて維持発展させることが意図されているように思われる。その一方で当時の遠野市政は，行政施策下において近代的市民組織としての自治会づくり(市内70の行政区単位)，旧町単位の「地区地域づくり連絡協議会」の結成を新たに試みた。この旧町単位である各地区の中核に位置づいていたのが，新たに構想された地区センター(いわゆる地区公民館の遠野版発展形)でもあった。ハード・ソフト両面からのまちづくりの展開は，「遠野の場合は，施設づくりというのは単なる手段で，もともとたとえば市民一斉に七月の第一日曜日に運動会をやるとか，あるいは9月14.15日に遠野まつりがあるわけですが，ずっと前から引き継がれてきたものを，いま建物を手段として盛り上げていこうという動きが着実にあらわれているのではないか」⁽¹³⁾とも評価されていた。

こうした地域組織再編の構想に連動して，行政組織としては「市民生活行政・社会教育行政の一元化」「生活圏域における地域づくり，地域保健・医療，社会教育の一体的推進」が掲げられた。このため地区センターで，社会教育職員は地区地域づくり連絡協議会を中心に地域づくり支援にとり

くむとともに、保健師が地区センターで社会教育職員と席をならべる特徴的な施策がうたれ、社会教育と福祉・保健をむすぶ遠野モデルとして注目も集めた⁽¹⁴⁾。この協働モデルは、2002年に市の保健福祉の拠点「健康福祉の里」が開館するまで続いた。

なぜ遠野で、1970年前後というかなり早い段階から、市長部局と社会教育（市民活動推進）の一体的推進にとりくまれたのだろうか。背景のひとつに、1960年代後半の遠野における、地域の姿容への危機感があった。遠野市では他の地方自治体と同様に、若年の人口流出が際立ちはじめ、人口は、1961年の38430人をピークにゆるやかに減少し、1970年時点で約5000人減の33464人になっていた。古くは物流交流の拠点であった遠野も、電車や道路の開通により、見る影もなく衰退していた。

その中で掲げられたのが「将来に希望の持てる田園都市を創る」であった。工藤市長は、行政の推進と人づくり・地域づくりを一体としてすすめる方向を打ち出した⁽¹⁵⁾。だが、それは工藤市長の独断ではなく、市役所の35歳以下の若い職員12人によるプロジェクトチームに将来展望素案を依頼し、出てきたのが「トオノピア・プラン」であったという。「聞いた私のほうがびっくりしました。いろいろ話を聞いたら、遠野がよくなるうとして、世間並みに進もうとしても、市民一人ひとりがその気にならなければだめだ、要は市民の生涯教育だということです」⁽¹⁶⁾。

この遠野市の「トオノピア・プラン」は1968年に出されており、ほぼ時を同じくして翌年にだされた国のコミュニティ政策との類似性も気になるところである。市民社会の形成、市民の参加がう



「将来に希望のもてる田園都市」を掲げた、トオノピアプラン概念図

（日本地域開発センター編『トオノピアプラン』清文社、1982年、10頁より）

たわれている点は共通するように思える。だが「トオノピア・プラン」は都市への人口移動が急激にすすんだ人口急減下の地方にあって「定着と循環構造の社会」を目指すものであった。「行政計画は、物をつくったり一つのプランを示すと、それが一人立ちをして動きます。すなわち、市民全体がそれを受け止めた際に、市民のものとしてその計画を進められるようなものでなければ、本当の計画とはいえないということです」⁽¹⁷⁾と、明確に参加に基づく計画化の見地、住民自治・団体自治の視点が貫かれ、その実現の中核に生涯教育・社会教育がおかれている。この点、都市社会学者たちによってコミュニティ分析が機能的になされ、社会教育の役割は新たなリーダー人材育成に限定してとらえられていた当時のコミュニティ政策とは、決定的な相違があると考えられる。

以上のような「郷土を学ぶ気風」と「生涯教育の重要性」への意識をもとに施策展開されたのが、市民センター構想およびカントリーパーク構想であった。これらは社会教育施策として組織化され、市民参加型の特徴的な事業を生み出した。その典型例が、市民センターを拠点にはじまった市民創作劇「遠野物語ファンタジー」(1976～)である。また「遠野常民大学」(1987～)や常民大学を中核として発足した「遠野物語研究所」(1995～)も民間ベースの活動であるものの、組織化の発端においては行政・社会教育関係者の関与がみられる⁽¹⁸⁾。

遠野物語ファンタジーの場合、1976年の初演からはや40年をこえる活動が継続され、その後遠野の影響をうけながら、釜石、盛岡、前沢、花巻、北上など県内に市民劇の活動が続々誕生するなど、たぐいまれなる存在感を放ってきた。ある遠野市の職員は「遠野市における市民センターと地区センターを中心とするコミュニティ活動並びに社会教育活動の象徴ともいえるのが、市民手づくりの舞台「遠野物語ファンタジー」である。これは日本の民俗学の原点である柳田國男の『遠野物語』に、市民が新たな息吹とエネルギーを吹き込み、『遠野物語』の舞台である遠野市民によって、歌い演じられ、まさに現代の遠野市民が作り上げた「新遠野物語」といっても過言ではない」⁽¹⁹⁾と紹介している。対外的にも数々の受賞歴をもち、注目を集めてきた歴史的蓄積をもつ実践であり、近年では佐藤一子が、『地域文化が若者を育てる』(2016)で改めて詳しくとりあげている。

佐藤は当時の関係者へのヒヤリングに基づき、遠野物語ファンタジーが市民センター設立の目玉事業であったことや、遠野物語の再生の意味にとどまらない、地域の学習基盤との接続において注目している。遠野ではそれ以前から旧町村単位で青年団活動が活発であり、脚本からすべて自分たちの手で創作上演する演劇活動が活発であった。ファンタジーの当初10年の役者たちは青年団関係者だったという。また当時学校教育と社会教育の断絶がはじまりつつあったが、ファンタジーを通して小中校の生徒や先生たちの参加を促すことが可能になったともいう。「子ども時代から地域の文化に親しんで成長するという農村地域の文化的風土が土台にあったことがわかる。遠野物語ファンタジーは、いわばその土台を現代的に再生させて、引き継いでいこうとする試みであった。社会教育と学校教育が一体となって『地域文化と人づくり』をめざすという発想が、40年以上にわたって継続されてきたのである」⁽²⁰⁾と佐藤は評価する。

発起人濱田栄一氏はじめ当時のファンタジー関係者への筆者の聞き取り(2006年)においても、ファンタジー発足当初から、遠野市民全体が市民センターやファンタジーの動きに協力的だったわ

けでは決してなかった。濱田は、ファンタジーを単なる演劇舞台にとどめることを意図的に避け、合唱、郷土芸能からバレエまで、また裏方も含めて多くの人が様々な形態で参加し、市民の文化レベルを高めることに資する、総合舞台として展開してきたことを語っていた⁽²¹⁾。地元の郷土芸能の掘り起こしにもつながる40年をこえる地道な努力が継承され、ファンタジーは市民のものとして定着してきた。

と同時に濱田は、ファンタジーが遠野物語を題材にしながらか、遠野物語理解のためのものではないとも語る。

そもそも、この取り組みは、市民の方々、お客様に遠野物語の内容を知ってもらおうというのが目的ではないんですね。目的が違うんです。だから、当時の遠野物語に書かれている、当時のその時代の我々の農民、市民の生きてきた過程、そういう様子、そういうものを現わす、そのことによって、これからの遠野で我々が生きていくんだけれども、子どもたちも含めてね。これから生きていく上で、何か参考になればいいなど、そこが大事なテーマなんです⁽²²⁾。

1960年代から70年代という農村と人々の暮らしの文化の大きな転換期にあたって、遠野では地域に蓄積されていた民俗文化・青年団活動などを見つめ活かしながらか、社会教育行政を重く位置づけた総合政策を通して、文化の新たな土台を構築してきたことがうかがえる。本論は佐藤の理解と同じく、その象徴に、市民センター構想や遠野物語ファンタジーをおく。遠野における「社会教育」は、文化・保健福祉・地域づくりなど政策全般を視野に、人づくりを起動させる具体的なシステムであり、民俗文化の現代的な組織化を促していったとみる。

ただそのなかで、「伝承観」の点からみて、トオノピアプランや各施策が促した民俗文化の現代的な再組織化は、どうとらえるべきだろうか。

まずファンタジーに関して、発起人の濱田の証言に基づくならば、遠野物語や昔話の延長上で伝承の再生をはかるものというより、明確に「伝承」とは一線をひいたひとつの現代的な総合舞台としてみるべきなのであろう。そのうえで、当時の農民の生きてきた過程や様子を示すことに目的がおかれていたことは、のちにみる阿部やエ伝承論と歩調をあわせるものとなっており、興味深いところである。

一方、常民大学を中心に設立された遠野物語研究所に関しては、別の様相がみられる。例えば、元遠野小学校校長であり、引退後遠野物語研究所を牽引するとともに、研究所で新たな語り部を育てる昔話教室の運営にも尽力した佐藤誠輔は、昔話を活字化すること、新たに語ることに、それらと外部の関与との関係に主たる視点をおいており、いわば〈制度化された伝承〉そのものを推進する動きを典型的に示している。

昔話は遠野の人たちは、どう伝えてきたか。遠野の人たちは、これは遠野から外の人たちの、外的な刺激のおかげがたいへんあったのです。石井先生がいらっしゃいますが、そのように、外からの刺激のおかげで、40年代から50年代、50年代になって初めて活字で遠野の昔話が出されました。そういうことで、私たち遠野人は、外の人々に対して、柳田をはじめ、いろんな人々に対して、ありがとうと言わなければなりません。活字で、それを一つできました。と、同時

に、遠野人は何をしたか。遠野の人もがんばりました。それは語り部としてがんばったんです⁽²³⁾。

この「語り部」の動きは、次節でより詳しくみていく、〈制度化された伝承〉につらなる象徴的事象として、注目すべきものである。

第4節 『遠野物語』を核としたまちづくりと、「民話」「語り部」の制度化

トオノピアプラン以降の施策とその実践にその基盤をみながら、以降では、「民話」「語り部」の制度化ともいえる現象を石井正巳『遠野の民話と語り部』（2002）の論述を基におっていきたい。この現象には少なからぬ研究者が注目している。たとえば川森博司は、鈴木サツが、耳に残る父親の語り口、伝統的な方言のリズム、刊行された書籍をあわせて再構成しながら主体的に語りをつくりあげる様子を描きだす⁽²⁴⁾。それは政策からではなく語り手主体の側からみたもうひとつの「制度化」の姿のようにも思われる。また吉川祐子も主に遠野の状況を題材に「語りの変容」を論じており、それは生活の変化以上に、ある種の目的をもって意図的になされるか、民俗文化や信仰や意識が現代人に伝わらなくなった結果であるとまとめている⁽²⁵⁾。ただここでは『遠野物語』と遠野における「語り」の関係をみていくことを目的として、『遠野物語』を熟知する立場から、『遠野物語』の社会的位置に強く影響をうけながら遠野の口承伝承が変容していく様子を描く石井の議論を1つのテキストとして考えていくこととする。

そもそも「民話」という用語は、ある時代から遅れて使われ始めた用語であるという。先んじて存在していた「昔話」という用語は、柳田國男と佐々木喜善が『江刺郡昔話』（1922年）をまとめていく過程で見つけ出した言葉であり、民俗学の普及とともに大衆化したものだと指摘されている⁽²⁶⁾。

一方、遠野において「民話」および「語り部」という言葉を導入したのは、遠野市内で小学校長を歴任し、退職後に1970年ころ発足した「遠野民話同好会」会長もつとめた福田八郎だという。福田は「民話」を、昔話、伝説、世間話を広く包括する用語として使っている。こうした影響をうけて、本来はほとんど接点がなかった『遠野物語』と「昔話」の世界が、遠野では「民話」という言葉を通してくぐられ、いまではその相違が意識されることはないほどになっているという。

その影響の具体は、遠野の「語り部」たちに即してみるのがわかりやすい。

遠野で最初に注目された、昔話の草分け的人物は、北川ミユキ（1898～1982）である。佐々木喜善と同じ土淵村に生まれ、佐々木とは縁戚関係にもあった。『遠野物語』で語られるオシラサマも実際に祀っており、まさに『遠野物語』を語る語り部として、北川は注目される。彼女は遠野を訪れる人々を家に招いて対応し、語っていたという。

一方、遠野の「語り部」の創始者と石井が位置付ける鈴木サツ（1911～1996）は、1971年にNHKの取材をうけて語り、同年、遠野市民センターのこけらおとして、はじめて「オシラサマ」を語る。この指導にあたったのが、先の遠野物語と昔話の世界を、用語使用において結び付けた、福田八郎であった。鈴木はその後、遠野の「民話のふるさと」のまちづくりの展開を牽引するかのよ

うに、観光と結びついた語りのスタイルをうみだしていく。ここで注目すべきは、鈴木は父親から昔話を聞いてきた経験をもつものの、聞いてきた話のなかに『遠野物語』にかかわる話の一つもなかったということである。鈴木は外からやってくる観光客の求めに応じ、自ら『遠野物語』を習得し、のちに『遠野物語』を語りうる遠野を代表する語り部になる。福田から『遠野物語』を学び、また父から聞いた話を『聴耳草紙』で補完・確認していく、60歳をこえた鈴木への努力は並大抵ではなかったという。石井はそれを「『遠野物語』の昔話化」と称し、下記のように鈴木と福田の様子を描いている。

昭和46年に12月に、遠野市民センターができて、こけら落としをしたとき、サツさんが呼ばれて、突然「オシラサマを語ってくれ」と言うことになり、それで福田さんが「オシラサマとはこういう話だ」と教えたのを聞いて、冷や汗で舞台上がって語ったそうです。その場で聞いて舞台上で語れるというのですから、驚くべきことです。語りの真諦ができていんでしょう。そのあたりからすでに「オシラサマを語ってほしい」という願望があったことになります。そういう要求を敏感に感じ取っていたのがおそらく福田さんであり、その導きで『遠野物語』とかかわる話を語るようになったのです。

しかし『遠野物語』の話は、ほとんどが本来、昔話ではありません。「昔」という言葉はずいぶん出てきますけれども、柳田国男が序文で「目前の出来事」「現在の事実」と言っていますように、実話として語られていたのです。話型としては昔話と一致するものがいくつかあり、実話としても昔話としても語られる話があったと思いますが、『遠野物語』全体から見れば、一割にもなりません。

そういう中で、サツさんは『遠野物語』を昔話にすることを試みたことになります。大変優れた語り手だったからできたのだらうと思います。サツさんが現れる前には、土淵町の北川ミユキさんに期待されていたところがあり、昔話として語れることがまったくなかったわけではありませんが、『遠野物語』は昔話としてあったわけではないのです。サツさんの登場によって、『遠野物語』は、良い意味でも悪い意味でも、本格的に昔話の世界に組み込まれたのです。これは遠野における特筆すべき事件だったといってもいいでしょう⁽²⁷⁾。

これをまちづくりの観点からみるならば、遠野は日本中で共有できる大いなるコンテンツとしての『遠野物語』を民俗文化として息づく昔話の世界にくみいれ、それを旗印として掲げることによって、昔話・民話の世界を遠野市のまちづくり政策の中核に位置付けていったといえるだろう。

新たな概念としての「民話」「語り部」の浮上は、遠野におけるまちづくり政策との一体化にとっても、転換点をなすものであったらう。本論が「制度化」ということばをつかっているのは、単に語りや口承伝承の世界の話だけでなく、この時期にある種の文化が、明確に政策的な位置づけをもつようになっていったことの強調を意図している。

鈴木サツをもって誕生した遠野の「語り部」もまた、もはや純粹に地域や家庭で営まれていた「むかし」を語る存在とは異なり、あくまで『遠野物語』と「昔話の世界」が当時新たに一体化されて登場したもの＝「民話」を語る存在として、登場することになった。それは本論からいえば、伝承

観の変容そのものでもある。

こうした「民話」「語り部」に関する状況はすでに、石井に先じて野村純一が察知し、危惧を表明していた。以下は、石井に先立つこと8年、1994年の文章である。

遠野は『遠野物語』に事寄せて日本民俗学発祥の地を謳い、併せて早くから“民話のふる里”をアピールしてきた。市民の中から昔話の語り手を見いだしてきちんと処遇し、そのうえで年に一度の“遠野昔ばなし祭り”に備えていた。試みとしては大胆、かつ新鮮な企画で初めのころは無性に面白かった。第一回は昭和59（1984）年である。急ごしらえの舞台の上で、顔馴染の近所の婆んちゃんがみんなの前でもじもじしながら、それでもなんとか得意の“むがしこ”を披露していた。小正月の晩ということもあって、吹雪の中を長靴をはいた子どもたちが賑がり込むようにして会場に入って来る。会場は会場で蓆敷きの至極荒っぽい設いであった。腕章をまいた職員が幼い子を抱きかかえて席に運んでいる。ほとんど配達しているというような雰囲気であった。遠野ならではの気分が横溢していて、それはそれで結構楽しかった。少なくとも、柳田の『遠野物語』を突き抜けた熱気がそこにはたしかにあった。

しかし十年たてば様子は徐々に変わってくる。変わらないのを期待する方が無理である。この間、知られるようになった語り手の媼は、それぞれに自分たちの昔話集を刊行する機会を得、土産物店には競ってそれが並べられた。やがて彼女たちは互いに他人行儀の装いをするようになる。ついで媼たちは一年を通してよそからの旅人、多くは一過性、不特定多数の観光客を前にして昔話を語ることになった⁽²⁸⁾。

ちなみにこの「遠野昔ばなし祭り」の様子は、決して偶然の産物ではなく、野村自身も、この場における単なる見学者ではなかった。当時、この企画の発案者の一人である梅田収得は、当の野村純一に相談しながら会の設定を構想している。その結果この祭りは、遠野の民俗―「むかし」とその場のありよう同様に、観光に最適な夏ではなくあくまで冬場に、「炬燵、囲炉裏端で、昔話大会です」⁽²⁹⁾とこだわりをもって、考えられていったという。

こうした配慮に連動するように、野村は「町場の風俗や思潮にとらわれることなく、遠野はなおその郷中に持続している遠野の民俗をいまのうちにきちんと記録にとどめ、その仕事を通して次の世代のひとたちを扶育、育成して行くのが急務ではなからうか」と切実に問いかけていた⁽³⁰⁾。

行政担当者も、発案時点においては「伝承の制度化」のもつ危うさ、二面性が察知されていたことがうかがえたが、その後の展開は野村の危惧に示されるとおりであった。〈習俗としての伝承〉観を保持する人材の育成を、と野村は願い、そこに研究者としての野村自身の伝承観も表明されている。しかしそれは同時に〈制度化された伝承〉観への移行のただなかでこそ発された危惧でもあった。

民俗学の岩本通弥は、現代は「記憶と一体化した歴史の終焉」（あるいは「身体化された過去（歴史）の消滅」）を特徴とし、その断絶感ゆえにむしろ、「記憶の場」（場所、制度やシンボル、作法や著作物など）がたちあがるという。

民俗学でも人類学にしても、文化が無意識に伝承されることを前提としてきたが、現代は伝承が伝承として意識され、意図的に記憶を作り上げる時代である。これを「文化の客体化」と命題化して観光人類学などでは、地元の当事者が観光というコンテキスト中で積極的に操作する姿に、「現地の人々の主体性」や「創造過程」を見いだしたが、その主体性を強調した表象化も、構築主義からの批判に曝されている。その批判を受け止めるためには、おそらく記憶の複数性や住民の多声性を含めた記述に努めるほかはない。小関隆らもいうように、通常、共同体内部には複数の記憶が並存し、それらがいくつかのレベルでの主導権争いを通じ、普段に構築され続けている。こうした記憶化過程の複数性を記述することで、伝承母体論以降、共同体を統合する集合表象として一枚岩に捉えてしまった「民俗」や共同体に、リアリティーを回復することも可能となろう⁽³¹⁾。

岩本の論を借りるなら、遠野における計画行政とまちづくりは、地域の民俗文化に根差した「記憶の場」を、地域の未来への危機意識を起爆剤として、まちづくりの中核に立ち上げる動きであったといえる。しかし、地域に存在する力学のなかで、記憶の複数性が担保されることは難しい。遠野の場合、『遠野物語』および、新たにつくられた「民話」「語り手」が主導権をとるかたちで伝承観が新たに生成される一方で、民俗文化の経験をもつ人々の伝承観は背景に退いていく。こうした状況は、阿部ヤエが語ろうとする〈意味としての伝承〉への理解の土壌を失わせるものとなっただろう。

第5節 遠野の民話・語り部のまちづくりにおける、阿部ヤエの位置

本論は阿部を、〈意味としての伝承〉の伝承観を探究し語る者と位置付けているが、遠野の観光まちづくりの側からは逆に、〈制度化された伝承〉の語り部を代表する一人とみなされてきたことは、興味深いところである。

2018年に阿部が逝去した折、遠野市は市勢振興功労者であった阿部への対応として、パンフレットを作成し、葬儀の参列者に配布している。そこで阿部は、以下のように紹介されていた。

昭和49年に遠野のわらべ唄の歌手としてNHKのテレビ放送「奥さんごいっしょに」に出演して以来、永年にわたり、遠野を代表する語り部のひとりとして、本市を訪れる観光客や修学旅行生に遠野のわらべ唄や昔話を紹介し、観光の振興に貢献した。

特に、幼少のころに口承により伝えられたわらべ唄が、人間としての生き方や生活の知恵を伝えているものであることに着目し、その収集と保存に力を注ぎ、500余編に及ぶわらべ唄を採録し、「遠野に伝わるわらべ唄」「遠野わらべ唄の語り伝え」「わらべうたで子育て」等の著作として出版し、遠野のわたべうたの第一人者として活躍した。

また遠野のわらべうたが次の世代に受け継がれていくことを願い、市内の小・中学生への伝承活動や、全国の教育関係者への指導を行うなど、民俗文化の保存伝承に尽力した。

昭和55年4月から平成12年3月まで遠野市立博物館研究員、平成17年10月から現在まで遠野

市文化財保護審議会委員等をつとめ、教育文化の向上と市勢の発展に寄与した功績は顕著である。

阿部の活動が「全国の教育関係者」へ影響を与えていたことが紹介されていること、また彼女が単なる語り部ではなく、収集保存も行う研究者的側面をもっていたことに踏み込んで書かれていることは、特筆に値する。それでも、全体としては、遠野のわらべうたを代表する語り部の一人という世間一般の評価が踏襲されている。

語り部としての阿部、という評価は、研究者の側からも同様である。先にみた石井正巳の『遠野の民話と語り部』には、「遠野の語り部たち—10人のプロフィール」という章が設けられており、ここに阿部も紹介されている。語り部10人は北川ミユキにはじまり生年月日順に紹介され、阿部は9人目に紹介されている。

【略歴】昭和9年(1934)、松崎村(現松崎町)光興寺の農家に生まれました。多くの話は、子守に預けられている間に、菊池カメというツツ婆(ツツは乳のこと)から習得しました。身体が不自由だった婆は、わらべ唄や昔話を学問として教育してくれたと言います。わらべ唄を得意とし、歴史に結び付けて伝えている点に特徴があります。わらべ唄は約500曲採録したそうです。伝承が教育に果たす役割を深く考え、自ら筆を執って書物を書くこともあります。『遠野物語』の世界は、村で生きていくために知らねばならない噂話であったとして、昔話とは明確に区別しています⁽³²⁾。

10人のうち、『遠野物語』と関連する土淵町出身が北川ミユキにはじまり3名、それ以上に多いのが、綾織町出身者で、その4名はともに鈴木サツの妹や親類関係にあたる。阿部ヤエの出身地である松崎町からは、同じ光興寺出身で同級生でもあった菊池玉と阿部ヤエの2人が、紹介されている⁽³³⁾。

阿部ヤエ以外の9名の紹介では、出身地や家族関係、とくに誰から語りを聞き、どのように語り部になったか(いつどこで、表で語るようになったか、どう活躍しているか)が中心に記されている。これらが「語り部として」という枠内で語られている一方で、阿部の紹介は、語っている内容の違い—「わらべ唄」に特徴があること—、およびその意味—教育に果たす役割—、そして昔話と『遠野物語』との違いの認識(それは『遠野の民話と語り部』に示された石井の認識と一致している)など、その記載は「語り部」の枠をこえており、他の語り部たちとは異なる記載となっている。

ただし、阿部ヤエの紹介において「伝承」という言葉が登場しているが、同じく記載されている「昔話」と「伝承」は何が違うのか、いったい「伝承」とは何を意味しているのかについては、ここでは明らかではない。

次に、〈研究者たちの伝承観〉と〈意味としての伝承観(阿部ヤエの伝承論)〉の関係がみえる記録をとりあげたい。それは遠野市内の民間研究者を中心に結成・活動され、全国の民俗学者たちが支えた「遠野物語研究所」が1999年に行った、『遠野物語』ゼミナールの講義記録⁽³⁴⁾である。ここ

には、阿部やエが登壇し語った記録とともに、後藤総一郎（遠野物語研究所長）・三浦佑之（同客員研究員）・石井正巳（同左）・佐藤誠輔（同研究員）と阿部やエ（肩書は「遠野市立博物館研究員」）の5名によるシンポジウム記録が掲載されている。阿部とともに登壇するのは、全国でも名だたる口承文芸あるいは柳田國男研究者たちである。

記録は、阿部と阿部以外の登壇者の見解との共通性とずれを、明確に示している。例えば、このシンポジウムの主題のひとつは、「昔話と遠野物語の関係をどう考えるか」であった。登壇者は皆、両者は異なるということがわかってきた、という地点において一致した見解を示している。ただし、何が違うのかについて、少なくとも聴衆である市民にむけたわかりやすい提示は行われておらず、理解可能なポイントは、遠野固有の昔話が数多く存在し『遠野物語』はその氷山の一角、遠野の一地方である土淵の話にすぎない、というところにある。例えば後藤は「市長さんもしばしば注文を出すんですけども、もっと広い意味での「遠野物語」を書いてくれと。でないとあれは喜善の知っている身の回りの、土淵だけの話ではなかろうかと。そういう話があって、佐藤先生中心に「広遠野物語」のような形で集大成させていくことが、これから必要じゃないか」と発言している⁽³⁵⁾。

一方で阿部は「わたしの場合は「むかし」と「はなし」とは、全然、違いますから。」「昔話は子どもの精神を育てるものだし、「遠野物語」のような、ああいうものは覚えておかなければ、大変なことになるよっていう、警告みたいなものとして、はっきりわかるように教わりました」と明言する⁽³⁶⁾。阿部の場合、習俗としての「むかし」（正確には柳田國男が概念化した昔話とは異なる）をその一部とする「伝承」の存在や目的を、自らの生活思想と存在の拠り所として、明確に認識しているためであろう。それと「遠野物語」は存在意義や発生過程において、全く別次元のものであった。

またそこで注目したいのは、「昔話」「わらべうた」への理解である。そもそも、口承文化研究において、「昔話」研究と、「わらべうた」研究は、別系統で探究されてきた⁽³⁷⁾。その理解に基づけば、阿部は、わらべうたを得意とする一人の語り部として位置づけられる。しかし阿部の理解する伝承の系譜にとって、「昔話」と「わらべうた」は別物ではない。

2003年、遠野物語研究所の活動を牽引した元教師の佐藤は阿部に、次のように問う。

ヤエさんは童歌が専門ですが、実際には童歌にしる昔話にしる、そういう形で、本当の話として教わったとか聞いたとか、そんなふうにとってよござんすか？

対して、阿部は

あのなんす、私はあの人たちが語ったのは、わらべうたというのは結局庶民の唄だよなす。その歌を中心にして子どもを育てて、その中に昔話というものがあって、昼や童歌で語り、夜は昔話を教えて、対になってんのす。鳶と烏が喧嘩をしているときでも、歌を歌えば昔話がわーっと浮かんできて、そしてその状態が、なぜ喧嘩をしているのかが分かるという。田螺長者でも、遊びがあって、遊んでいる時昔話を思い出すって、動作が遊びだって、くつついているの。そうやって、話と現実と一緒に教えてったんだなす⁽³⁸⁾。

と、わらべうたを特化してとらえる佐藤の見解をやんわりただしている。阿部は伝えられたままに、

わらべうたも昔話も、いかに人を育てていくかという目的あって存在するものと確信をもっている。しかもそれぞれに意味あって、昔話とわらべうたは対で提示されていたと考えている。ここに学問的分類観にたつ佐藤とのやりとりは、すれちがうわけである。

夜に語られる昔話は、昼間のわらべうたで子どもたちが自然や人とむきあっていくこととの対において、存在する。また昔話の具体的な機能は、人が現実に向き合い、現実を理解し立ち向かっていく力を育てること、まさに現実をめざめていくための媒体となる点にあった。

先のシンポジウムで後藤総一郎は、阿部ヤエの発題をうけて以下のようにいう。

昔話というのは昔の人の精神、人をつくる話として、大切に聞いてきたんだと教えられました。これは倫理を養うということですね。それからわらべ唄というのは、遊びから遊戯をとおして楽しく心を育んできたというものだ。—中略—そう考えてヤエさんのお話をまとめると、わたしが描いてきた、童話というものは、昔話というものは人間の想像力、幼少年期の想像力を、純白な魂のもとで無意識のうちに育んでいくんだという貴重なものとしてあるのが分かります。もう一つは、歴史意識を養っていく。そういう原体験を昔話のなかで、われわれは育まれてきたのではないか。つまり、日本の旧約聖書としての昔話の中でそういう想像力や歴史意識を養ってきたのではないかと思います⁽³⁹⁾。

後藤は前半でいったんほぼ正しく阿部の理解を踏襲しつつも、後半においては「想像力を育む」という、自身のファンタジーとしての昔話、童話観を示している。

だが阿部は先の発言にもみられるように、常日頃より、昔話やわらべうたは子どもの想像力ではなく、社会と自然界にある生きた現実に向き合う力と意欲を引き出すものと位置づけ、むしろ伝承としての昔話はファンタジーではないことを強調していた。

その後、資料の発掘や研究の進展もあいまって、『遠野物語』が一種の文学であり、伝承世界とは異なるものであることは、研究者たちのなかでもほぼ共通認識として共有されてきた。しかし「文学作品としてある種の完成度をもった作品であるにもかかわらず、そこには非常に猥雑な遠野の生きられた伝承世界が埋もれていて、そこかしこにそれを見いだすことができる」(赤坂憲雄)「『遠野物語』が文語体で書かれていようが、柳田の手がどれほど入っていようが、その部分の腑分けさえうまくして、分析なり読み取りの訓練さえしていればきっとその世界の奥には遠野の生きられた伝承というものが見えてくるに違いない」(三浦佑之)⁽⁴⁰⁾など、研究者にとって、伝承とはそもそも外から探索する対象であり、『遠野物語』はその重要なテキストの一つであるという。

ならば、『遠野物語』は昔話とは異なるという認識にたちつつも、それが文学か伝承世界かはあまり重要ではないということになる。研究者にとってはそれでいいかもしれない。しかし遠野の人々にとってはどうだろうか。『遠野物語』の浮上により、習俗としての伝承観は後景に退き、かといって学問特有の思考様式に基づく研究者たちの伝承観を受け入れることも難しい。習俗としての伝承の記憶をもつ層を除けば、遠野の人々は、遠野物語と昔話を混在する伝承観へ移行するしかなかったのではないだろうか。

いわば、〈研究者たちの伝承観〉の影響力が増し、〈制度化された伝承〉の具体が広がるなかで、

〈習俗としての伝承〉の影は、単なる時代的な現象という以上に、薄くならざるをえなかった。こうしたなかではまして、阿部ヤエの伝えるような〈意味としての伝承〉を理解する余地は、失われていったであろう。

なお、外部の研究者や遠野物語研究所の人々と阿部の対話が行われた記録は、管見のかぎり2003年が最後である。その後、阿部は、昔話の世界、あるいは民話のまちづくりについては、ほとんど語っていない。

小結

本論は、阿部ヤエが伝える「人の一生を育てる伝承」の位置を描き出すことを念頭に、遠野という土地において働いた社会的力学とその影響に注目しつつ、異なる伝承観の存在とその混在および変容を描こうとするものであった。

遠野市では計画行政に基づき、遠野物語に基づく観光文化のまちづくりも、社会教育行政も推進されてきた。1970年初頭という早期の段階から市民参加の下に地域文化に根ざした学習実践を推進する層の厚い試みは他自治体に先駆けるものであり、社会教育の観点からみて一つのモデル的な事例であろう。しかし従来のようにいかなる教育の組織化・制度化がなされうるかみに意識の中心をおくと、そこでの組織化の内実を決定づける、当事者たちの葛藤や価値観の混在を、見落としてしまうように思われる。

本論は、阿部ヤエが伝えた「人の一生を育てる伝承」のような、暮らしのなかで人から人へ手渡されてきた文化から、伝承の転換点を見つめようとした。阿部は、石井らが描いたような遠野の民話・語り部の制度化のただ中でも、昔話・わらべうたを一種の文学として特化することなく、それは庶民が子どもを育てるためのものであり、自然も生きものも含めた暮らしの現実とあわせて用いるものと主張していた。しかしそれは当時の地域の言説において受け入れられることは、難しいものでもあった。

だが関連して社会教育実践の推進に携わった当事者たちことばに着目すると、そこにもまた葛藤が提示されていたように思われる。菊池幹は、内容がわからなくても「むかし、むかしあったずもな」と何回も同じことを繰り返して歴史を教えていくのが「民俗」だがそれが理解されがたいことを語っていた。また遠野物語ファンタジーを率いた浜田も、ファンタジーは物語を後世に伝えるためだけでなく、「その時代の我々の農民、市民の生きてきた過程」を表現することに重きがあると語っていた。菊池や浜田の仕事がその地の教育や文化の制度化の中心に位置づけられた一方で、彼らの「伝える」ことの本質に迫るこうしたことばが、どのくらいの影響力をもって理解されたかは定かでない。

こうした価値葛藤やその背後にある生活文化は、〈制度化された伝承〉の内実にいかなる影響を与えてきたのか。残された今後の課題とともに、ここにインフォーマル教育的視座の可能性を、改めて確認したいと思う。

註

- (1) 星野スズエさんへの聞き取り 2018年9月16日
- (2) 佐藤一子『地域文化が若者を育てる一民族・芸能・食文化のまちづくり（シリーズ田園回帰7）』農文協，2016年。
- (3) 前掲佐藤2016，52頁。
- (4) 石井正巳『遠野の民話と語り部』三弥井書店，2002年。
- (5) 石井正巳『昔話の伝承と資料に関する総合的研究』（H15-16科学研究費補助金研究成果報告書，2004年。
- (6) 本報告書は関係者への聞き取りをできるだけそのままに記載する方法がとられている。
- (7) 前掲石井2004，7頁。なお，文中に『文化財報告書』とあるが，遠野市で1960年代までに発行された関連する報告書は，以下のとおりである。

報告書等の名称	発行年	発行
文化財報告書（第1集）	昭和32年3月25日	遠野市教育委員会
文化財報告書（第2集）	昭和33年3月30日	遠野市教育委員会
近世遠野城下町榊形調査報告	昭和34年	遠野市教育委員会
文化財報告書（第3集）	昭和34年3月30日	遠野市教育委員会
遠野市附馬牛東禅寺跡発掘調査報告	昭和34年3月30日	遠野刊行会
遠野鍋倉城跡	昭和36年3月25日	遠野市教育委員会
陸中早池峯連峯の植物	昭和36年5月20日	上西科学教育研究会 岩手県遠野市

(2019年3月1日，遠野市図書館提供)

- (8) 前掲石井2004，8頁。なお，工藤千蔵（市長在任1967～1982）はカントリーパーク構想，トオノピアプランなど遠野市のその後が続く方針をつくりあげていった時代を率いた市長である。自ら揮毫した碑文「出でよ りく続として出でよ ふる里を愛し ふる里の明日を創る人たち」は今も市民に親しまれているという。
- (9) 前掲石井2004，22頁。
- (10) 阿部ヤエは，それはより小さな，集落単位で異なっていると語っている。
- (11) 前掲石井2004，22頁。
- (12) 前掲石井2004，24頁。
- (13) 遠野に12,13回通ったという秋田県二ツ町教育委員会職員発言，前掲『トオノピア・プラン』159-160頁。
- (14) なお筆者は1995年にこのモデルに注目しヒヤリング調査を行った経験をもつが，公民館主事にあたる地区センター職員が地域づくり支援業務に自然体で従事していたこと，一方で彼らがまちづくりに埋没しない遠野モデルの「社会教育の仕事」としての自負を強くもっていたこと

- を、印象深く記憶している。
- (15) 鈴木惣喜「トオノピアプランと遠野のまちづくり」遠野市政策研究会編『遠野スタイル』ぎょうせい、2004年、6-7頁。なお本著は市政施行50周年を記念して発刊されたものであり、本田敏秋市長の巻末言もよせられている。
 - (16) 工藤千蔵「ふるさとのまちづくり——トオノピア・プラン」日本地域開発センター編『トオノピア・プラン——自立する都市・遠野からの報告』清文社、1982年、5-6頁。
 - (17) 千葉富三「トオノピア・プランの背景とめざすもの」前掲『トオノピアプラン』、40頁。千葉の執筆当時の肩書は水道事務所長であり、明記されてはいないが、文章からはトオノピア・プラン策定時に中心的位置にいた一人と推測される。
 - (18) なお、「遠野常民大学」については、北田耕也監修、地域文化研究会編『地域に根ざす民衆文化の創造——「常民大学」の総合的研究』藤原書店、2016年、において遠野の活動とその背景となる常民大学運動全体について総合的に検討されている。なお遠野常民大学についての執筆を担当したのは、佐藤一子である。
 - (19) 佐々木奈央「生活サービスの総合的提供システムと地域づくり」前掲『遠野スタイル』155頁。
 - (20) 佐藤一子『地域文化が若者を育てる』農文協、2016年、78頁。
 - (21) 埼玉大学岡研究室『2006年度埼玉大学岡ゼミ遠野・森と風の学校調査合宿報告集』、127-135頁
 - (22) 前掲埼玉大学岡研究室報告集、127頁。市民センターが社会教育課を中核とする総合行政として位置づけられる中で、濱田が当時の社会教育担当者であったことは特筆しておきたい。なお同時に社会教育担当者としてファンタジーに関与できる年限には限りがあるため、濱田は41歳で役所を退職し、市議会議員に転身している。
 - (23) 佐藤誠輔「昔話を伝えることの大切さ」『遠野物語と昔話（『遠野物語』ゼミナール2009講義記録）』遠野物語研究所、2010年、219-220頁。
 - (24) 川森博司『日本昔話の構造と語り手』大阪大学出版会、2000年。
 - (25) 吉川祐子『遠野昔話の民俗誌的研究』岩田書院、258～259頁。
 - (26) 前掲石井2002、116頁。
 - (27) 前掲石井2002、208-209頁。
 - (28) 野村純一『昔話の語りと語り手（野村純一著作集第四巻）』清文堂、2011年、345-346頁。初出「遠野への視座——はるけき山河の伝承——」『フォークロア』第5号、1994年。
 - (29) 前掲石井2004、11頁。
 - (30) 前掲野村著作集第四巻2011、347頁。
 - (31) 岩本通弥「方法としての記憶——民俗学におけるその位相と可能性」『現代民俗誌の地平3 記憶』朝倉書店、2003年、8頁。
 - (32) 前掲石井2002、240頁。

- (33) ただし菊池玉は、土淵とゆかり深い著名な語り部・白幡ミヨシの娘であり、実のところ阿部ヤエ以外は、土淵町関係者か鈴木サツ関係者で占められている。
- (34) 遠野物語研究所編『昔話の世界（『遠野物語』ゼミナール'99講義記録）』、1999年に基づく
- (35) 前掲遠野物語研究所編著1999年、281-282頁。
- (36) 前掲遠野物語研究所編書1999年、279頁。
- (37) いうまでもなく、戦前の柳田國男、関敬吾ら民俗学的手法による昔話研究以来、過去ばかりでなく現実の拮抗関係の中の昔話への着目も含め、日本口承文藝學會（1977～）における研究の中心は昔話であった。研究対象として民謡はとりあげられるが、わらべうたについてはまれである。わらべうたはむしろ、子どもにかかわる、保育研究や子どもの民俗学といった観点から注目されてきた。
- (38) 佐藤、阿部の発言ともに前掲石井2004、103頁。
- (39) 前掲石井2004、268-269頁。
- (40) とともに赤坂憲雄、三浦佑之『列島語り——出雲遠野風土紀』青土社、2017年、82～84頁。

Change and mixture of ways of looking at oral tradition in Modernization: A Case Study of Tono City

Sachie OKA

This study discusses the ideals and trends of views about oral tradition in Tono City, Iwate Prefecture. We try to clarify the location of “an oral tradition that nurtures a person’s life” transmitted by Abe Yae, who is a successor of local oral tradition.

In Tono, where Yae Abe lived, people in many villages handed down their old tales from grandparents to their grandchildren until shortly after the end of World War II. It is said that children who grew up in the same village were brought up through the same song and story. There is the <folklore as a custom> that these people have practiced on a daily basis. However, Yae Abe has revealed the world of meaning which is behind the phenomenon of songs and stories that has been handed down secretly in the region. Even in Tono, few people know that. We will call <Traditional view as meaning>. On the other hand, the Tono municipal government has been promoting a policy of developing a town for tourism and culture for about 50 years with “The legends of Tono”(Kunio Yanagida) as its symbol. In response to the direction of community development and the demands of tourists, a new tradition was created in Tono. There is a <institutionalized view of tradition> . In addition, Tono was involved in the study of “The legends of Tono”, so there is the <Views of tradition shared by researchers> that the researches have.

The main subject of this paper is to explore the position of the theory of Yae ABE’s tradition while being conscious of the differences and contact points between these four views of oral tradition. The major trend in folklore has shifted from <folklore as a custom> to <institutionalized view of tradition>. Where the administration was intentionally involved as in the tradition, the transition was further encouraged. On the other hand, the more <Researchers’ view of tradition> looked squarely at the changes of the times, the more they tended to accept <institutionalized view of tradition>. In the time that <folklore as a custom> was gradually disappearing, it was difficult that <traditional view as meaning> from Yae Abe was socially unacceptable.

In addition, we pay attention to the strata between these traditional views. In particular, the impact on <institutionalized succession> will be an important issue in the future.